

Title	マルト・ビベスコと彼女の小説 (IV)
Sub Title	Marthe Bibesco et ses romans (IV)
Author	佐野, 満里子(Sano, Mariko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2000
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 No.31 (2000.) ,p.23- 47
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20000000-0023

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

マルト・ビベスコと彼女の小説 (IV)

佐野満里子

4. 《Isvor、柳の里》

《緑の鸚鵡》を出す1年前の1923年4月に、マルトは《Isvor、柳の里》を出版した¹。この作品は《緑の鸚鵡》や4年後の《カトリーヌ=パリ》とはかなり異なった趣をもつ²。当時のルーマニアの農村での自然と村人達の生活をえがいたものであり、作者が自分の国そのものをあつかった小説はこれだけと言えよう。マルト自身はブカレストに生まれ都会育ちであるが、1902年の結婚後は首都郊外のComarnicで暮らした。Diesbachはここでの経験からこの作品をまとめたとしている³。

第1次大戦が起き、1916年対独宣戦を行ったルーマニアはわずか三ヶ月で格段の軍事力をもつドイツに占領されてしまった。マルトはブカレストの病院で傷病兵の看護にあっていた。翌年の春、占領軍から国外追放命令をうけたマルトは五月に出国、オーストリアで防疫隔離期間を過ごし、母と娘のいるジュネーヴに着く。亡命の状態におかれた彼女は1918年のはじめにEugène Pittardのルーマニアについての本を受け取った。この本は良き手

-
1. Marthe Bibesco; 《Isvor, Le pays des saules.》 (Plon-Nourrit et Cie) 1923
本稿では M.B; 《Isvor, Le pays des saules》 (Christian de Bartillat) 1994 を使用。
 2. 日吉紀要No. 28、No. 29、No. 30の拙稿《マルト・ビベスコと彼女の小説》(I) (II) (III) に記載
 3. Gislain de Diesbach; 《Marthe, princesse Bibesco》 (Perrin) 1997
伝記的事実はこの本による。

引きとして幸福であるべきこの国がなぜそうではないのかを考えさせ、いまは国外にいる者の心を愛情で満ち感動したことを日記に記している。亡命者のノスタルジーから故国について筆をとることになったと考えられる。マルトが戦前からプロシアの皇太子と親しかったことと、出国にあたりオーストリアに滞在したことが敵側に通じていると見なされたために、戦争終結後もしばらくは中傷の渦巻く故国にも、パリにも戻れなかった。

冒頭にまるで序文のように Emilien から Marie への手紙が示される。3月3日にパリ発の「Mon amie」と書き出された手紙はギリシャ神話のプロセルピーヌのように1年の半分をパリで、半分は故国ですごく習慣を持ち、出発した恋人にあてた恨み言めいている。社交人士らしい気取った言い回しで、多くの女性との恋を経て作り上げた理想の女性をマリイにみたこと、そして彼女が彼の情熱にこたえられるかどうかを知るために1年間を過ごすべく故国に旅立ったことが述べられている。柳の里であるその村で彼女をとりまく人々といえ、マリイの義母、医師、義母の付き添いの英国人 (Pitts)、そして土地の人々だけであることも知らされる。義母の存在はマリイが結婚したことを教えるが、作品中で夫について1度も言及はない。夫を亡くし、彼女自身が女地主となったと考える他はない。

この手紙のあと、全てをマリイが語る日記のような体裁ですすめられる。春にはじまる四季、そして再びむかえた春の順に5部をなしており、全体をとおしてローマ数字をふった44章に細かく分けてある。第1部の春の部分が最も長く、全体の半分以上にあたる。

Isvor への帰還

語り手のマリイはオリエント・エクスプレスでパリを発って3日目にドイツ、オーストリア、ハンガリーを通過して村に帰ってくる。そこがルーマニアであるとは示されないが、ハンガリーの隣の国であり、作者がマルト・ピベスコであることで読者には明らかである。

ここではIone、Marie、Anicaという名が多く、そのあとに仕事や夫の名をつけて呼ぶことで区別をする。それらの名前は歴史に残ることもなく、忘れられてきた。この土地でまず「私」の目にはいるのは柳だ。人が家を建てる時、まず1本の柳の木を植える。それは大きくなって門の代わりになり、中庭と野の境界をしるし、井戸に陰をつくる。柳のもとで暮らしている人々と共に「私」は困難な生活を始めてみようとしている。

以前には、ここが砂漠のように思われて辛かったが、彼らがそこにいて彼らの生活があることに気づいてから「私」は一人っきりでではなくなった。彼らの生活が「私」の暮しを限りなく豊かに、そして複雑にしてくれる。

「私」がいつもの村人訪問を始めると、義母は医師に「あの人には世話をやる貧しい人たちがあって良かったですよ。」と言った。義母も若いときには同じように訪問を行っていたが、年を取り外出しなくなった。語り手の村人訪問は、昔の領主の奥方の慈善、施しの訪問とは違う。関心と愛情をもって村人の生活に入ってみようとしている。

帰郷するとすぐに「私」はたった一人で夕方の雪解けの道を散歩に出てみた。通りには人影がなく、家々にも人の気配がない。ただ、家畜の鳴き声だけがきこえる。皆、働いているのであろう。もしも村人が私を目にしたら、遠くからでも会釈するであろう。それは「私」が帽子をかぶっているからであり、彼は帽子に挨拶したのだ。このあたりの女性たちはショールやスカーフを頭にかぶっている。たとえ村の女たちのようなよそおいをしたところで、人はけっして騙されないものだ。

語り手は自分の身なりから、土地の人々からはっきりと距離を置かれることを述べ、彼女の帽子が識別記号となっていることを認めている。若い女地主は村では孤独な存在である。女性の一人歩きを白眼視する時代と階級なので、彼女は義母にみつからないように裏階段から家に入り、ぬかるみの道で泥だらけになった靴をぬぐのをOutza 婆やに手伝わせる。婆やの指は泥亀の首や手足と同じ素材で出来ているかのように黒っぽい。婆やは土地の者でただ一人女主人のそばにいる。そして村の生活についてたずねるとき、彼女

は自分の論理の通じない女主人にたいし敬意をもってこたえてくれる。婆やは村人たちと語り手の間の橋渡しをしているのだ。

村にはあひる、がちょう、猫、犬、鶏、豚などが人々と非常に近いところで共に暮らしている。西欧とくらべて動物たちが人間的に扱われている。村人の家に行くと、テーブルに鶏が飛び乗ったり、ベッドの下に子豚がいたりする。だが復活祭後40日めに犬たちを棒でうち、鶯鳥にはリボンを飾ってちやほやする。もう理由もわからなくなった習慣だけが残っているのだ。

春、復活祭に前後して沢山の祭りがある。

『ラザロの日』。スイス人の警備員とグレーハウンド犬にまもられた庭内に3人の少女が案内され、おそろおそろ入ってくる。最初の少女の歌う聖書のラザロには、よみがえったあと2度と笑わなかった、天国と地獄を見た彼の姿が付け加えられている。2番目の少女はラザロの花嫁役で、彼女の嘆きがうたわれる。最後に母親にガレットをもらえなくて、母の手から落ちた錘で心臓をついて死んだラザレルの歌。「私」には子供を甘やかすこの土地の歌らしいと思う。少女達は菓子をもって退散した。

医師はこれらの歌は、トルコの支配下のキリスト教徒がコソボの戦いで倒されたセルビア王の嘆きを隠し伝えたものではないかとの意見であり「私」は同感だ。同じダニューブ河の恵みをうけるものとして、対岸の歴史も無縁ではない。素朴な村人達の伝える文化の豊かさにふれる思いがした。

時計の国のスイス人の警備員は、少女たちに「また仮装だ！ 学校にゆけ！」と怒り、いままで大事に守った中庭に村の者をいれたのが不満である。

村人にとっての「死」

『聖火曜日』は『ブランコの火曜日』である。ユダが首をくくった日にちなみ、あちこちの木に縄をつるしてブランコをする。

『聖木曜日』は『死人たちの祭り』であり、婆やがそのために作る菓子は、本に出ていた古代ローマのものと同じであった。「私」は婆やと約束して村

にゆく。その朝は、早くから女達は自家の果樹園で一番日当たりの良いところで小枝を燃やし、墓から出てきた死者たちが帰る所を間違えないようにとそれぞれの名前を叫んでいた。あの世からやって来た旅人が休めるように、焚き火の周りに椅子やクッションを並べ立てている。

「私」はここで行われていることを知らなかったのを残念で寂しく思う。子供時代の屋敷でこのように火をたいて、「ジョルジュお兄ちゃん！」と呼んだとしたら、一刻もじっとしてられないあの少年が私のほうに跳んでくることが見えるだろうに。

語り手は、村の女達の風習に気持ちを通わせ、忘れることの出来ない亡き兄をおもう。この本の翌年に出版する《緑の鸚鵡》の主題であり、《アネモネ聖地巡礼》で本名でふれる兄の名を出すことで作者マルト・ビベスコが語り手のマリイと一体になり、顔をみせた感じがする。

陽が高くなると女達は水差し、食べ物をいれた籠をもち、死者の終の棲家である墓におもむき、蠟燭に火をともし。途中で小石をひろって円を作り、共に墓に帰ってくる死者が渴きを癒せるようにと水を注ぐ。墓にパンをそなえ、大忙しの司祭に祈ってもらう。ついてきた子供たちが供える以外のパンをもらっているのを、婆やは「『忘れられた者』のパン」だと言った。

何者も忘れまいとするこの土地で、「私」は自分が死後、きっと迎え火も飲み水もない『忘れられた者』の中に入れられるであろうと考える。だが名を呼んでももらえない自分の霊のため小鳥たちがパンくずをとりあうと思ひ心むのだ。ここで語り手は夫を亡くし、子供もないことがうかがわれる。

粉屋の長男の妻マリイは二人の子供があり、下の子はまだ生まれてまもない。彼女は肺結核におかされている。彼なりにあらゆる手をつくしたあと、粉屋は「私」の所にきた。私は医師とともに彼らの家に行った。医師は入院を勧め、彼らは素直に従った。しかし、いよいよ最後が近づくと彼女は家にもどってきた。婆やは「自分の枕で死ねますように」と、村人皆と同じ意見

を言った。病人のそばに薬草やくすりをもった老女が付き添って「悪」と闘っているらしい。

マリイが死に、棺を家から運び出す時に村人達は習慣にしたがって夫を窓辺に連れて行き、彼に三度外を見させる。婆やは「そうすることで死んだ者を忘れられるから。」といった。残された者が外界に関心を示すことで、外からの救いを呼ぶことになる。

ここで語り手は再び作者と重なり、《緑の鸚鵡》のテーマが現れる。

ああ、私たちのまわりでは兄が死んだ時に誰もこの古い習慣に従わなかったのだ。私たちの子供時代は暗いものになるしかなかった。息子の埋葬のあとに誰も母を窓の方に連れて行かなかったのだ。そうすれば、母は自分の他の子供達が庭で遊んでいるのを見たであろうに。

それで母は20年間も忘れることができずに生きたのだ。(p. 187)

マルトがこの作品を書いている1920年に、彼女の母は死をえらんでいる。マルトにとり幼い時に失った兄はかけがえのない存在であった。だが、亡き一人息子の思い出にひたりきって、生きている娘達に目をむけることの少なかった母の態度は、死後にも受け入れられない。貧しい農民はいつまでも死者にかかづらってられない。毎日働きずめでようやく生きてゆく彼らが健全にみえる。村人達がまるで生きている者を迎えるかのように「死者の日」の行事を行う一方で、生きている者は死者にこだわりすぎずに生き続けるように形式を持ち続けている。作者はその知恵をかたちにして残していることを評価しているのだ。

村の女達

妻亡き家の前で涙を流している粉屋の息子に「私」が子供のことをたずねると、彼は自分も子供達とおなじことで、妻を亡くしたのは母を亡くしたようなものだ——自分たちに食べさせ、楽しくさせ、着るものを与え、みんなも家も清潔にしてくれたのは妻なのだ。自分の着るシャツは、麻であれ毛で

あれ、織り糸の一本も妻の手によらないものはない。妻亡きいまとっては、どれを着ても身を焼かれるような気がすると言った。(p. 185)「私」は屋敷に帰る道々、自分はあるほど誰かの幸福に必要とされてはいないのではと考える。粉屋は愛する妻を失うとともに、彼の生活に必要なものすべてを無くしたのだ。だが、「私」が屋敷に戻ると義母に言われた。「あの男は、よく妻をぶっていたのを知っている？」

語り手は自動車を用いることのできるのクラスに属し、何人もの使用人をおいている。しかし Isvor の村人は牛、馬に荷を引かせ、工業製品のはいつてこない世界で衣食住の全てを人の手でまかなわないと生きてゆけない。男と女が組になって苛酷な労働を分かち合って生きてゆくしかない。村には結婚せず年を重ねてゆく娘はいないのだ。

娘たちの最大の関心事は夫さがしである。付き添いの Pitts は15歳の娘がいつか靴の泥落としをせず、頬に紅をつけて踊りに行ってしまったと怒る。娘達はいつでも仕事を投げだして祭りやダンスに行ってしまうのだ。

『五月の木』とは柳の木であり、一番良く葉のついた枝を切って家の前の土に立てる。これは『愛の五月』、インドの生命の神シヴァ神の指をあらわしている。この日を祝って、『聖 Marc の日』と日曜について今週3回目のダンスがおこなわれる。「私」は村の真ん中まで見に出かけた。ダンスに既婚の女性は加わらないことを婆やに教わり知っている。居酒屋の前の土地で人々がジプシーのヴァイオリンで踊っている。最初のダンスのつぎに前のとちがう激しい音楽が奏でられ、まず男だけが踊り出す。すると女たちの中から一人がすすみ出て男の一人の肩をたたく。ここはオリエントなのに、女が男を選ぶことが Isvor の娘たちにゆるされている！ 娘たちが一人ずつ踊りの輪に入ってゆく。

一番美しい娘が一番遅れて踊りに来た。彼女は遅く来ることで男たちの想像力をかきたて、一層欲望をそそることが解っているのだ。作者が知っているパリの社交界と大差のない心理のかけひきを村のダンスの中に見いだしている。

人々が楽しみの最中に車を呼びにやるわけにゆかず、「私」は犬を連れ一人で歩いて帰った。義母は「私」の外出が体面にかかわり、夜の一人歩きは危険だと小言を言った。ここの男達はたとえ酔っていても、「私」の帽子と衣類で遠くからは異国の聖職者と思うでしょうし「私」を知っている村人にも地主ではなく性別も年齢もわからない変な人にみえるでしょうと答えた。

「私」はダンスに興じる村人たちの喜びを分かち合った。「他人の喜びを自分の喜びとし、それを眺めるのが私の運命ではないか？ そしてそれを幻想と言えるかもしれない。(p.177)」若い女性である語り手は、土地の人々には性も年齢もない、聖職者同様なのである。

昇天祭の前の月曜日に少女達は粘土でこしらえた人形を木箱に入れ、葬式ごっこをおこなう。少女たちはいとおしげに人形に接吻してから河に流す。愛する者を犠牲にするかわり、作物のために沢山雨を降らしてくれるように神に祈るのだ。語り手は、これはあらゆる政府が未来の妻や母に共同体のため愛を犠牲にすることを勧める行為のようだと言う。作者がブカレストの病院で看取った傷病兵たちは、なにも知らずに強力なドイツ軍の前に引き出された貧しい農民達であった。

村の娘たちは魔術を身につけなくてはならない。男を引きつけ、とらえておく魔術を、『洗礼者ヨハネの祭り』は水の祭りである。司祭が家々の戸口を水できよめて廻るとき、娘達は夫を得るたたかいの武器である櫛や首飾りを戸口ちかくにひそませて、祝福してもらう。また祈りを込めた柳の葉を護符として肌身につけている。大晦日から元日にかけて彼女たちは魔法の心得があるとされている老女の所で未来の夫のことを知るための様々な試みをする。本当に強い娘だけが徹夜の試練にたえて自分の運命を知ることができる。

ダンスの時だけは女が男をえらべるが、夫選びはそうはゆかない。女は男が行動するようにしむけるほかない。語り手は「この変わった国 (p.286)」を訪れた数少ない旅人の証言をあげる。18世紀のマプロコルダート公の秘書であったフランス人とギリシャ人が書きのこしたもののから、この土地の女性

達のもつ男を魅了する力について引用をしている。マプロコルダート公は作者の母方の祖先にあたる。

だがおなじ女性としての語り手には娘達のたどる道が見えている。

このあわれな娘たちのかりそめの美しさを輝かせておこう。娘たちの美しさは長続きはしない。ひたむきに願った運命がかなえられた時、彼女たちはどうなるだろう？ それを知らながら、一人としてそのくびき、重荷を前にしてたじろぐ者はいない。長年の隷属の見通しに怖じ気づくものはないのだ。彼女達はただ男のためのごわつた衣服を紡いで織り、男のために働き、薪を水を運び、子をはらむことになろう。それも彼女達の肉体が他の者に役立たなくなり、老化し、損なわれて子を宿せなくなるまで。(p. 95)

作者は土地の女達の厳しい人生にいたわりの眼差しを忘れない。

無知と迷信

肺結核のマリイは死の間際まで赤子に乳を与えていた。

四旬節近くにサロマイアが出産した。東方教会は復活祭までの間に肉だけでなくミルクも卵も採ることを禁じている。村人は堅くこれを守り、この時期に酸っぱいキャベツしか口にしない。母子とも具合がよくないとのお知らせで、私は医師とともにその家におもむいた。母親は一年前には輝くような美しい娘で、屋敷の洗濯場で働いていた。いまでは同じ人間とは思われない程やつれている。母子の健康のために肉やミルクを届けさせたが、二人とも口にしないどころか、子豚にミルクを与えていると伝わってきた。義母のすすめで司祭を呼んで話してみるが、彼は解決する気もなく、貧しい人々の迷信深さにうち勝つ方法はないと言うばかりだ。私はサロマイアの夫のイオンを呼び説明するが、解った様子はなかった。頭の良い婆やを使いに出そうとすると、彼女は不機嫌で口実をもうけて断った。その後、婆やはあの家まじらないをする老女が行ったことを、「私」を喜ばせるとおもって告げたのだ。

赤子は死んでしまった。

この国の乳児死亡率は高い。医師は新生児の母親が四旬節の断食にはいると、よほど強い子供以外は死んでしまうと言う。「私」は教会の上の方に働きかけて、場合により断食をやめさせたらと言い、義母は「私たちには特免があります。」と言った。この義母の言葉を、作者はそっくり《カトリーヌ＝パリ》のレオポルスカ夫人にも語らせ、力のある貴族階級が、宗教をも自由に行っている部分をのぞかせている。ルーマニアは東方教会の国だが、作者マルトは1912年にカトリックに改宗している。

医師はここにはスパルタの伝統が残されていて、母親達は知らずに生き残れる子供を選んでいるのかもしれないし、これはどうすることも出来ないと言うのだ。「私」は四旬節に母親がミルクを飲むためには、キリスト教より古くからの習慣で植え付けられたけがれへの畏れから解放されなくてはならないと思う。この畏れは世の中のあらゆる道理よりも、幼い子を死なせる恐れよりも強いのだ。

『聖金曜日』は大事な祭りであり、屋敷で雇っている村人は皆やすんでしまう。その他何人もの聖人たちの祭りの日も、働くとその日の聖人が怒り、報復として害虫や病気で作物をだめにするといい、休みにするのだ。「私」には外国人の使用人たちが腹をたてるのが良くわかる。彼らは、この国の人々が長い間他人に使われて死ぬまで休息がなかったことを知らない。自由のないこの人たちは、仕事を休む迷信をつくりだして身をまもったのだ。

語り手はこのように「Outza 婆やの賢い民族」を弁護する。ここに描かれているのは農奴解放後半世紀と少しのルーマニアの農村である。だが彼女が身近に使うのは婆や以外すべて外国人であり、この国の人々をあてにして暮らしてはいない。馬や家畜の世話をする男たちと洗濯場の女たちだけが土地のものだが、それ以外の使用人は小間使いはスイス女性、洗濯場の責任者や門番はドイツ人、警備はスイス人である。女主人の衣類の世話をする小間使の手を荒らさないため、泥だらけになった靴の世話は婆やにさせる。語り手の生活水準を保つためには村人は下働きにしか雇えない。語り手自身がこの

国の国民だと言っても、すくなくとも村人とおなじ国民だとの意識は持ち得ない。

役所に村人達が労務提供をおこなう日に働くことを拒否した。駅では木材が運ばれてこないで、空っぽの貨車が待っている。「私」が村を歩いた時、「今度はほんとうだ！ Isvorの百姓らは反乱をおこすだろう。」とのささやきをに耳にする。屋敷に戻ると村人の代表が来ていた。この日は『牛の聖マルクの祭り』であり、牛を働かすと聖人の怒りにふれて動物が死んでしまうと彼らは訴えるのだ。少し前に「私」が村の役所であった裁判を見に行っただけ、村人は「私」に裁判をしてもらえと考へたらしい。彼らは天の罰よりも地上の罰の方を選んだのだ。言い分はもともとであり、この方向で彼らを理解すべきだ。なにも言わずに村人を引き取らせたと、義母は「あなたは連中に反乱を唆すの？」と言い、Pittsは「革命家 (révolutionnaire) になられるのですか？」という。語り手は革命家になるのではなく、もともとそうなのである (je ne le deviens pas, je le suis, par essence.) と答える。この国で自分たちのクラスだけが進歩思想をもつことができるが、村人達は反動的で古い法を守り続け、自分たちとその手先はその法を絶えず破っており、もし自分たちについて罰が下るとしたら、なによりも伝統に尊敬を欠いたためでしょうと語り手は結ぶ。(p. 172-3)

与え援けること

「私」は故郷に着くとすぐに管理人に手伝わせてあちこちの所有地の住民からの手紙を見る。無筆の彼らは公証人に書いてもらった手紙で失った牛や馬を、木材を求めてくる。相続や婚資などでうけつがれた「私」の土地は5カ所にちらばっている。持てるものとしてクリスチャンとして、与えることを務めとしても、すべてをかなえることは不可能だ。「私」はこの地主という仕事をはじめたばかりのころ、持てる者として求められるままに家や薪用の木を与えた結果、ある地所の森林が国の定める法律にふれるほどに減ってしまった。村人たちはわざわざ作った道よりも近道を通りたがる。牛や羊の

群をひきいてあたりかまわず通過するので木々も牧草も痛めてしまう。現在しか考えず、将来の様子を想像できないのだ。

地主の私有地に村人の牛がはいると、村役場が引き取って罰金と引き替えに牛を返している。牧草は貴重だ。牛の罰金が払えないと泣きついてきた寡婦に小銭を渡したことから、騒ぎがおきる。警備員たちは守っている資産をそこなった者を「私」がかばったことが不満であり、村の女達には「私」が役場の罰金で儲けていると受けとられてしまった。法律を守ることが自分たちの利益になると理解出来るときがこの土地の人々にくるであろうか？ 読み書きの出来る新しい世代をまっている間、親たちは子供を拘束する学校なるものために国家と結託している私たちを非難している。子供たちは靴がないと学校に行かない。読み書きが出来るためには靴がいるというので、「私」は彼らに靴を与えた。そのために子供達は足と頭の両方を痛めることになってしまった。

語り手は村人と自分の論理の食い違いを距離をおいてながめ、嘆き怒りたいところに諸諺を加える。西欧の社交界でできた機知の発揮でゆとりをみせる作者の力であろう。

冬に村人の家を訪問すると、どの家も熱すぎるほど薪をもやしシャツ一枚ですごしている。それで薪不足を訴える。寒さがおそろしいのだ。冬にはかならず家畜のえさが不足だといってくる。それは蓄えた乾草を売ってしまったか、「家畜が多すぎるのです。」と執事は言う。家畜に見合った量の乾草を冬前に蓄え、とれた乾草に釣り合う家畜の数で冬を越すという知恵を忘れるのだ。

未来に想像力のない村人から私有地をまもらなくてはならないが、特に貧しい者、恵まれない者には「私」の所での花つみや野イチゴ、サクランボ取りを許している。寡婦にはそれらの特典のほか、ミルクも薪も与えている。しかし、盗んだ果物を駅で売る娘がつかまったのを見て、「私」は心苦しくおもう。私たちのすばらしい森も村人達にとっては薪にしか見えないのだ。農民達は貧しさからやりくりを追われて持っているものを目いっぱい使ってしまう、先に備えることが出来ない。彼らに理解されなくとも、語り手は遠

い先を考えて森を守り、子供達の教育をすすめようと務めている。

地主であるということ

作業中の事故で失明した男がいる。彼は村の男でただひとり働かず、祭りでなくとも笛を吹いて十人もいる子供達の相手をしている。「私」がその家にゆくと近所中の人々がやって来た。「私」が奇跡で彼の眼を直すと思ったのだ。盲人に対し職業訓練を行っている町の慈善団体から勧誘があると、まるで軍隊に入れられるかのように一家全員が怯え、彼は行かなかった。「私」は数多い子供達の洗礼の費用、玉蜀黍や薪その他で一家を助けた。ところが与えたミルクでチーズを作って売り、「私」が命令したのに子供達は学校に行かず、登校用の靴を子豚と交換してしまった。

生まれてすぐに母をなくした子が父親に連れてこられた。母の妹が自分の乳飲み子と共に育てるといふ。「私」はこの子の離乳まで手当を出すことにし、毎週見にいった。成長するにつれて子供は自分のため一家がうるおうのを感じ取ってずるくなり、土地の伝説の霊に取り付かれる病に度々おそわれた。実の父が再婚して子供を引き取る機会に「私」は婆やの知恵にしたがい、とくに乳離れしている子への手当打ち切りを告げた。子供は「私」が手を引くことで仮病をやめ、村の子に戻るだろう。

この二つの事件で「私」は疲れをおぼえた。夏になり、四週間も雨がふらない。医師は旅行を勧めるので、「私」は少し遠い地所の Imoassa に Pitts をともなって出かけた。

終日、車で巻き上げられた土埃が道に降りる暇がない。埃は空中に漂い、ものの輪郭を濃くし、まつげを固くする。木の葉は糊づけしたみたいで、小さい柳の木はぎざぎざの鉛のようにかたい。平原に見えるのは埃だけ、舞い上がったままの埃…… (p. 223)

晴れた日も一日中灰色の日にしてしまう。世界中の死者全部がこの平

野を選んで埃となったと言えよう。毎日が「灰の水曜日」である。埃は地平線を消してしまうのに、何者も埃を消すことが出来ない。風は埃を運ぶが連れ去りはしない。埃はいたる所に入り込んで降り積もる。野生のカモミューの花の多孔質の芯やその細かな葉にも、私たちの胸元のブローチにすら。そして太陽を隠し私を咳込ませる。埃は Pitts の眼のなかの藁、私の眼のなかの梁である。(p.224)

ワラキア地方のきわめて厳しい気候のたくみな描写である。

「私」は今は誰も住んでいない Imoassa の屋敷に泊まる。貧しい人々の家は古くなると壊れ、鳥は春ごとに巣を作る。だが「私」達の住まいは時に耐えるように作られている。祖先の肖像や思い出の品々の残された部屋は死者に満たされた墓そのものだ。

部屋の中の蠟燭が曲がるほどの暑さに大地にひび割れが出来て、聖人の祝い日に司祭が先頭に立ち雨乞いの行列が行われた。祖父の時代に屋敷に略奪に入った人々の子孫の行列である。村人に薬をくばった祖母を知る老女が「私」に会えた喜びをあらわしてくれた。祖母のように病気を直す奇跡をもとめて来る者や、「私」が雨をもたらすと期待する者もいる。祖父が雷を起こしたというのだ。祖父はおそらく気圧計を見たのであろう。盗難にあったから裁判をしてほしいと「私」に願いでる女がいる。

ここでは語り手は代々領主であった祖先のあらゆる力を継ぐ者として村人達から期待されている。彼女はもう個人ではなく、長い歴史のある家族の血、沢山の死者たちを背負わされている。壊れやすい家や鳥の巣とくらべて、死者のゆかりの品々——それらも時に耐えうるよう選ばれた物——に満たされて、遠目には白い巨象のように見える屋敷を墓、ピラミットのようなと述べる時、作者は語り手に自分自身の人生を生きることをはばむ重苦しいものとして Imoassa の屋敷を表現しているのだ。《カトリーヌ＝バリ》の夫アダムが貴族の家柄の継承者としての役割をひそかに拒否していることに発展する主題である。

だが村人達は一度は反抗したものの、地主に恭順をしめすほかはなかった人々だ。農場の中庭で、働いている者たちの食事時に案内されると、最年長の男が「私」の生まれるまえから「私のパン」を食べ、皆もそうして育ってきたと述べた。食卓にパンは無かった。粗末な玉蜀黍粥でくらす人々にとり、パンはこの場合想像上の食物である。

彼らになにも無くても満足し、必要なものも意欲も持たないようにと勧める人々は自分たちが失なうものを解っていない。苦行者ばかりの国は、収税吏や国家を建設する者にとってこれ以上失望させるところはない！ だが、逆にこの地上で、しあわせと夢想に最もふさわしい国なのだ。(p. 237)

語り手は働く人々が置かれている生活に憐憫の情をもちあはするが、すぐには変えようもないことを知っている。彼女はあちこちの地所を管理させる執事達を変えない。新しい執事が来ると、あらたに着服が行われるからだ。

雨乞いの効果か「私」のためか、突然に大嵐にみまわれる。木々の葉をむしりとり、雹を降らせて沼をあふれさせる。翌朝はすっかりおさまったが、木々は裸で地面は青々とした葉ですっかり覆われている。管理人が作物の被害リストを持ってくる。麦は全滅、大事な玉蜀黍はなぎ倒されてしまった。「私」はいくつか地所を持っているので、ここの人々に他の土地の玉蜀黍を運ばせよう。

「私」は以前、凶作の Isvor によそから玉蜀黍粉を運ばせた時のように、途中でかびたので臭いから捨てなければならぬと言われるだろう。「私」は慈善はあきらめて、「私のなすことは全て、弱者に強者が押し潰されることになるのだから、(p. 239)」気晴らしに盲目の力が荒れ狂った光景、氾濫したダニューブ河を見にゆくことにきめる。

語り手は強い立場であったはずの地主が古くからのあり方が変わらない人々に対する時の無力さを表明している。それは厳しい干ばつと、降れば大

氾濫をおこして周りの地形を変えてしまうダニューブ河ぞいの苛酷な自然条件にたいし上から下まで全ての人々の持つ無力感であろう。沢山の鳥や動物の生息する小島を凶暴な力で変える一方貴重な水源であり、デルタでは海のように水平線いっばいに広がり、少しの物音もたてない。このダニューブの描写は、無力ながら力を感じさせる村の人々、その人々が恐れながらも依存している地主の双方の象徴のような感じがある。

復活祭後に、若い男たちが夜陰に乗り屋根や柳の木に登って、いろいろの要求を大声で訴える日がある。男女個人の批判が続くのを耳にして語り手は思う。村中が良い牧草地、良い木のある森が自分たちのものでないことを地主達に訴えるのに都合良い機会だろうと。小学校の終業式に求められて出掛けたときに、それは現実となる。「私」は壇の上にあげられて見せ物のようであり、子供達の余興の間に知らない農夫が壇に登ってきて、「人は土地が無い、牛には草が無い、旦那達がみんな食べちゃった、」と悲しげに繰り返した。教員が酔っている男を外に連れだし、村長は聴衆に恩知らずについて話し、校長は村のための「私」の尽力に贅辞をのべた。義母は昔から村の教員を土地要求の首謀者のようにみなしているが、「私」には村人達が騒動を起こしたら、これら村のエリートを頼みに防衛するほかないと思う。

終業式でダンスや朗読をしたのは皆教員や駅長、郵便局長、役人などの子供達で、農民の子供はいないことを語り手は見抜いている。農夫の地主非難について教員が彼女の善行をならべたてた時に無神経さへの怒りと無力感から涙を押さえられない。

語り手は、所有しているものに十分な所有欲を持っていないために「私たち」は持っている土地をいずれ失ってしまうであろうと予測する。所有しているものを守り抜くほど強く愛していなかったから。

辛抱しよう、私たちが資産を奪われるのは避けられないし、遠い先のことではない。いろんな国民のなかに自然なバランス感覚があって、あ

る階級の欠陥はいつも最後に他の階級に利益を与え、このようにして人々は知らずに助け合うものだ…… (p. 118)

彼女は西欧の国々を知り、各国から使用人を雇っている。自分の国よりも各階級が安定して共存している国々を見てきているのだ。

春に他の地所に行こうとした「私」は、執事に道が悪いからもっと先にするように勧められた。夏になるまで道はぬかるみで、牛に引かせる荷車しか通れないのを忘れていた。Pitts は富者の天国である英国の人らしく、あの国の大土地所有者にならって自分の所有地に住むように勧めるが、「私」には泥道が固まるのに150年はかかるかもしれないと思う。「私たち」は待てない！ 上の世代の人々は、すでに出来上がった文明の寄食者となって他国でくらしだ。

語り手は寝台車のお陰で十年に一度だけは所有地に赴く叔父の例をあげる。彼は広大な所有地からの収入で1890年頃にアマシーの湖のそばに別荘を幾つも無駄に建て、人造湖まで掘らせた。土地の役所は周囲の牧場への浸水を懸念し、叔父と子孫に年6ヶ月住まないと高額な課税を賦すことにした。子孫には嫌々6ヶ月は住む者と税金ですます者があった。叔父は「土地は取られるまえに売るんだね」と言っていた。

多すぎる財産のために私たちは損なわれてしまった。有産階級である私たちは多く持ちすぎたために下手な持ち方をしてしまった。それが私たちの落ち度だろうか？ (p. 119)

叔父は地主として所属する自分の国に愛情もなく、外国であるフランスに対しての責任感もない。彼の成金めいた消費にたいし、語り手の道義的にみでの批判が伺える。しかし一旦西欧の国々で過ごす快適さを知ると、後進国である祖国での生活には耐え難いものがある。車を受け付けぬかるみの道は、語り手にとり後進性そのものだ。「それが私たちの落ち度だろうか？」と言うとき、正直な開き直りに見える。

秋から冬へ

秋になる。「私」は村人達の嘆願を受けたり、婆やを通して頼んでくる病人の見舞いを続ける。結果として、毎日「私」はだれかの希望を裏切ることになる。ここを去ることも考えるが、それでは解決にはならない。

「私」は散歩の時、水の減った川で織り終わったばかりの布をすすいでいる女達の話し声を耳にする。共同で糸を紡ぎ、それぞれが部屋で織ったもので布の長さ、織細さ、美が織る者のエネルギー、忍耐力、腕前などをうかがわせる。語り手は女達のこの神聖な仕事に優しい眼差しをなげかけている。彼女たちは甲高い声でしゃべり、通りかかった若い牛追いと楽しそうにふざけあう。しかし中の一人が「私」を目にしたとたん、皆魔法にかかったかのよう黙ってしまった。

うちの羊たちの番をしながら笛を吹いていた羊飼も「私」が近づくと止めてしまい、いくら頼んでも続けてくれない。土曜日の晩毎、他の谷で働く若い男女が唱いながら車の音をさせ帰って来るのが聞こえる。もしも「私」に会ったら、彼らは黙ってしまうだろう。

「私は村人達を怖がらせ、恥じ入らせる。ある者は私を避け、他の者は不可解な信頼をみせる。」そして、「私は人々の中で本当に一人っきりののだ。(p. 253)」

秋の夜、隣接する農家である玉蜀黍の実をはずす集いに「私」はこっそりと行って見た。生け垣の外から見ていると、人手を頼んだ者はジブシーのヴァイオリン弾きを雇い、皆は玉蜀黍の山を真ん中に座り込んでふざけた歌を歌ったり、なぞなぞや言葉遊びをしながら大作業を続ける。語り手は彼らの言葉をいくつも書きとめたあと、歌や物語、一杯の酒、あるいは仲間と一緒にいる喜びのためには手を貸しても、金や契約では断る人々はだあれ？となぞなぞをまねている。

ワラキア地方の緯度はマルセイユに近いが、ノルウェイから黒海にぬける寒風のため冬はきわめて厳しい。

天候の変化、冬の訪れは貧しい人々にとり大問題で、いつ雪になるかを動物たちの様子から読みとろうとする。字の読めない婆やも月を読んで天気を当てようとする。やがて、雪が村中をすっぽりと冬の袋に入れてしまう。「私」は義母や婆やが訝しげなのにかまわず散歩にでかける。真っ白な頁の上に書かれた野ウサギ、狐、鳥、犬などの動物の足跡から行動を読みとる「戸外の読書」なのだ。だが、警備員たちは庭園内の薪や乾草の貯蔵所にむかう人の足跡を見つけ、泥棒対策の罠を仕掛ける許しを求めてきた。「私」は少し当惑しながらそれを断らざるをえなかった。もしも婆やの甥や顔見知りの村人が狼用の罠にかかって足を切断する事になろうものなら、「私自身が罠にかかったことにならないであろうか? (p. 270)」

厳しい寒さとともに飢えぬための玉蜀黍、凍えぬための薪をねだる嘆願書が増え、執事と門番は「私」が与える量に比例して庭園内の盗みも増えたと言う。作者は貧しい者に与えることが甘やかしになることをほのめかしている。だが語り手にとり、村人達が彼ら自身のせいにしろ怪我や死にいたるのに間接にせよ手を貸すのは避けたいのだ。

そうでなくとも冬は死者の多い時期だ。死者がでると全村人はその家に行く。さもないと非礼にあたる。ジプシー達へ飲み代を払える家では彼らの演奏つきで埋葬する。「私」は棺用の木材を与えることもある。

村人は吸血鬼を信じている。婆やによると、死者のうち5人の子持ちの美しいアニカは男達を感わしたため、成人した子供を何人も亡くした男は彼らを殺したのではと疑われたために、それぞれ吸血鬼と結んでいると考えられた。残された人間を襲わないように、彼らの遺体には杭が打ち込まれたという。語り手は「不気味な事 (p. 274)」として、聞いたことを抑えて語っている。中世かもっと古くからの習慣が突然出現したかのようで、素朴な村人の心の闇を見せられた感じを与える。春に遠出したおり、町の墓地で女達が身近な死者の名を呼び、大声で嘆きを語っているところに行き合わせ、「私」

は一体今は時代がいつなのかと思った。この国の多くの人々は、何代にもわたり自分のものではない土地を耕しながら、いつからかも解らない古い習慣にすがり自らを支えてきたのであろう。彼らにとって地主と吸血鬼の差は小さいだろう。地主は自由に歩き回っていた遊牧民を強制的に農民にし、この先はホワイトカラーやブルーカラーにしかねないのだから。

ノエルから新年にかけても祭りが続く。狼の守護者である『聖ピエールの祭り』には、羊を守ってもらうため羊飼いが供物と祈りをささげる。『気違いの聖トリフ』は気の狂った人々の聖人である。「私」は婆やに言いつけて、狂気にいたったと聞いている大伯母と叔父のために供物をととのえさせた。《緑の鸚鵡》で、ヒロインの大伯父と大叔母が恋を妨げられて狂気におそわれている。作者はここでも次の作品にふれていることになる。

「狂気の遺伝が残るかぎり、どうして相続の権利の廃止を望めましょう？ 生まれつきにある唯一の権利ですから。」と医師は言っている。
(p. 298)

語り手は、選んだわけではないが、遺伝と同様に相続した資産と地位を受け入れる態度を医師の言葉で表している。

よみがえりの春

寒さがゆるみかけ、散歩にでようとすると、婆やは道で馬が死にかけていると言う。乾草不足を「私」に見せつけるためと思われて出る気が失せる。そんなとき、執事が襲われたとの知らせがきた。三度目の横領でついに解雇された会計係が撃ったのだ。「私」はすぐにその場に行く。ユダヤ人の執事はこの土地に初めての工場を作ったことを誇りとしていた。最後に全ての鍵を「私」に渡させて、彼は息絶えた。財産の象徴である鍵を手にし、そのために命を捧げた人がいたことで「私」は自分が所有する者であることの重みを強く自覚する。



Mogosoëa の白衣の貴婦人

1913年の冬にビベスコ家に忠実に仕えていた執事が、解雇した若い会計係に撃たれた。彼はブカレストまで運ばれたが、命を取り留めることはできなかった。マルトはこの事件に強い衝撃を受けている。

不吉な事件と重い責任に打ちひしがれたのか、「私」は具合を悪くした。気分と空気を変えるための小旅行を医師に勧められ、今度はPittsではなく婆やを伴って祖先が建てさせた修道院にでかけた。何かあったときの聞き役であり、具合の良くないときには薬草の煙と繰り返しとなえる言葉で「私」を休ませてくれる婆やである。かつて富裕な有力者が災難を免れたり、償いのような災難を招いた時、教会を建てて献納するものであった。建立した者も子孫もそこに心の癒しを得、政争から避難する事もできた。

ここで60人近い修道女が何世紀にもわたり、日夜祖先とその子孫の名を唱えて祈っている。子孫である語り手にはいつでも泊まる小部屋が用意される。彼女は建立者一族の壁画を見ながら、トルコに捕えられ残酷な処刑をうけた祖先をおも。自分が受け継いでいる地位と資産にまつわる努力や犠牲の長い歴史は大変な重圧であろう。大そう歓待してくれる修道院であるが、婆やは「私」がここでは治らないと見抜いている。彼女は今日は神様に選ばれた人『聖アレクシスの祭り』だから、蠟燭で「私」のお払いをしたいと許可を求めた。婆やに聖人の話を聞いてみると、三種類のヴァージョンを持っており、しかも他の解釈の可能性もつけ加えるのだ。

パリから戻ってやがて1年になり、エミリアンの手紙はますます「私」をせき立て、そしてどんどん短いものになる。Isvorの女たちは春に自分の家の回りに灰で輪を書き、その中に侵入者は許さず、とどめておきたい者はそこから出さないでおけると信じている。「私」も家の回りに灰の輪を欲しい。自分をここにとどめておくために。「私」は婆やにアレクシスのように出掛けて、ふさぎの虫を海に棄てて来ようと言った。汽車に乗るのは婆やには大事件で、竜のような機関車をいつまでも見つめていた。

海は黄色、緑、青の三色をしている。婆やはこの水は牛に飲ませられない

と教わり、「不親切な水」と呼んだ。

港から土曜日毎に西欧へ向かう船が出る。Pittsは「そこで何をしてらっしゃるのです？」と手紙をよこす。「私」は海辺を歩いたり、走ったり花を摘んだりして時を送っている。

私は地質学上の誇りの危機を経験したのだ。私はヨーロッパで最も古い土地のひとつであるこの土地に愛着を感じている。

アイルランドがほんの少しとスカンディナヴィア半島がようやく海から現われたときに私がいる土地はもう存在していた。それは陸地であり、役立ってきたのだ！ 貴族の誇りは全て、大昔から役立ってきたことに尽きるのではないだろうか？ (p. 334)

「私」は発掘された遺物という笛を買い、太古にここで生きた人々を思う。目を岬の土に向けると、ローマの石の下にはギリシャの石が、その下にはフェニキアの石がある。そして「私」は次々に入ってきた幾つかの宗教がOutza 婆やの魂に層をなし、彼女の信仰の土台を作っていることが解った。

語り手は婆やをとおして土地の人々への理解を深めた。文字にたよらず口承で伝えられた話を婆やはよどみなく語る。幾つものヴァージョンがあるのは、様々な支配者がもたらす色々な文化と受けとる側の意識の変化をあらわすものであろう。聖アレクシスが神から貰った箱が「パンドラの箱」であったり、運命の女神パルクはアレクサンダー大王の侍女であったりする。婆やはなにかを信じ込むと他のものに耳を貸さない無知な人たちとは違い、狂信的なところがないと語り手は言う。常に西欧の論理だけで村人を断罪するPittsと対照されている。

「私」は2回も船をやりすごした。婆やは「私」の摘んできた野の花の名前も薬効も、それにまつわる物語も知り尽くしている。彼女が太陽の愛を拒んだために花にされた妖精の話をも韻文で語るのを聞きながら、「私」はもうエミリアンの呼びかけに応ずることは出来ないであろうと悟った。消えてしまった恋に忠実であると言うことが「私」の心に残っている。

真夜中に突然 Outza 婆やに起こされた。使用人が Isvor の家が火事にあったと知らせにきたのだ。「私」はすぐに「Outza、発ちましょう！」と言った。全てを捨てて立ち去ることを考えていたのに「私」はあわただしい支度の間も帰宅後の手はずを考え続ける。

私はエマニュエルのしたことをまねたいと思う。人々が彼の家に火をかけ、全ての蔵書が灰になった。彼はその人々の中に戻ってきて住んだのだ。咎めだてもせずに…… (p. 342)

作者マルト自身がここでも顔をだす。夫の従兄エマニュエル・ビベスコは1907年の農民の暴動で焼き討ちにあった。だが家を建て直し、『The Ashe』と名づけて住んだ。マルトも1915年に La Posada を焼失している。英国大使館附武官の Tomson 大佐から頼まれて書類⁴を預かった直後のことであつた。Mogosoša は1916年の暮れにドイツ軍が侵入した時、略奪にあい、荒しつくされた。作者は語り手に、失ったものを嘆くのなら、それを持つ資格はないという貴族の誇り高い姿勢を語らせている。

小説の結び

最終の XLVI 章は3月23日付けのマライからエミリアンへの手紙であり、「私が乗らない船が何便も発つたので、もうこの国から離れないであろうとお察しのことでしょう。」と始める。

最後のお手紙で貴方は民衆への愛という欺瞞に気をつけるようにと言

4. 航空相となった Thomson が事故死の後に出版した著書で、マルトは Posada の火事を不注意からの失火であつたと書いている。しかし、Thomson は予想される戦争でルーマニアを英仏側につける工作をしていたことも明らかにしており、Diesbch の説のとおり情報関係がらみの放火の可能性が強い。この火事でマルトは若い頃の思い出の品を全て失った。

Marthe Bibesco ; «Le Destin de Lord Thomson of Cardington, suivi de Smaranda» (Flammarion) 1932 p 74

われました。民衆にひろく愛情を持つとした人達に絶望と嫌悪だけしか残さないことを。心配なさいますな！ 私が Isvor の人々や彼等にした人々を愛するとしたら、それは彼等は私が気に入る力を備えている対象だと思うからです。私は道ばたの果樹が好きなのと同じことです。自分のものでなくとも花咲いて欲しいのです。(p. 344)

この作品の最初と最後に二人の間の手紙を置き、一つの恋の物語にしてある。だが、そのほかにエミリアンの名前は、300頁を越えるこの本の中で3度しか出てこない。マリイの恋は作者にとってこの著作を小説らしくする言い訳にすぎず、実際は語り手による Isvor のフィールドワークと聞き書きであり、若い女地主の成長の記録といえよう。

厳しい冬にも温室の花をたやさぬように薪を取り置く女地主と、無知で無計画のためにしる危険を覚悟でその薪を盗み暖をとらねば生きられない貧しい農民とは同じ意識でありえない。このような矛盾が抑えられなくなり、大戦とロシア革命で代々持てる者であった階級に黄昏がおとずれた。1914年にロシア皇帝夫妻がヨットでコンスタンツァを訪問したとき、マルト夫妻は歓迎行事に参加している。その皇帝一家は処刑され、ドイツ軍に国から追放されたマルトがスイスのホテルで見たのは居所をうしなった多くの貴族達であった。そこで書き始められたこの作品は、持てる階級がそれまでにみせた傲慢さを反省し、農民達を見下しすぎないように気を配り、彼らの発想に従ってその生活から良いもの、美しいものを見いだそうとしている。

すでに第1章で語り手は Isvor の1年間で解くべき問題をすべてあげている。「私」が求めるのはエミリアンか、それとも彼のさしだす自由なのか？「私」が村人達の中で暮らすのが、彼らにとり善いのか悪いのか？「私が土地を所有する者特有の熱意を持ち得るかどうか知るための1年間 (p. 6)」である。彼女は村人に愛情をいだき理解する。しかし彼らを縛らないよう、そうと知らせずに愛情をもつ。身分の違う者に対する愛であり、それは地質学者や植物学者が調査対象にもつ情熱に似ている。さびしい家庭の外に彼女は村人を知る喜びを見いだした。人々への愛が土地を持つことを正当なもの

とし、古い歴史を誇る貴族として村人達への義務感を引受ける。

もう一つ、「私の発見した世界は私の死とともに終わるであろうから、これを遺産、財産目録、贈与として残したい。(p.6)」、つまり本を残すというはっきりした希望がある。勿論、作者マルトの希望にほかならない。由緒ある家柄も時代の嵐に消え去りそうなとき、マルトは書いたもので村と人々の有様を伝え、自分の名を残すことに夢をつないでいる。

Diesbach は《カトリーヌ＝パリ》とならべ、この《Isvor、柳の里》をマルト・ビベスコの傑作にあげている。彼によると、この本はフランスでは好評であったが、ルーマニア本国ではそうではない。ブカレストの上流では大公妃を階級を裏切る者に見なし、庶民階級出身者は悲惨な農民の描写に喜ばない。その上フランス語で書くのでルーマニアの知的財産に寄与しないという非難があった。この国は当時非常に識字率が低かった。知的社会も外国の著作の導入を重要視していたようだ⁵。マルトとしては読み手が多い全欧州の上流社会を目標にフランスで本を出版して当然といえよう。これ以後彼女がルーマニアを作品の舞台に取り上げないのは、祖国で自分の書くものが受け入れられなかったことだけでなく、《Isvor》をポエジーあふれる美しい里に書きあげた達成感から、もうふれる気持ちにならなかったことも考えられよう。

5. M・エリアーデ、石井厚孝訳《エリアーデ回想》上（未来社）1990